

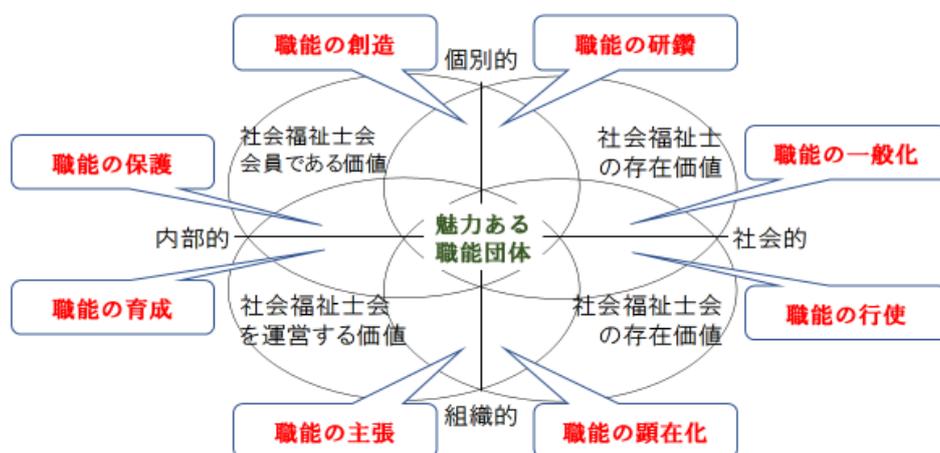
中期計画検討基礎資料

「社会福祉士および社会福祉士会の“価値”についての現状分析」

社会福祉士会のこれまでの活動状況に基づき、行動主体と行動対象について、魅力ある職能団体となるための要素として、それぞれの事柄がどのような価値を有するかを、ベン図を重ねて分析すると次のようになります。また、分析結果を会員が理解し共有することで、活動の共通基盤となることを企図して示していくものです。

分析結果資料

図1 2つの要素が重なるところに存在する価値



1. 社会福祉士の存在価値と社会福祉士会員である価値に重なる価値

(1) 職能の研鑽

社会福祉士個人としても、職能の研鑽は求められるものであるが、社会福祉士会員になることで適正な研鑽機会を得ることができる価値がある。

(2) 職能の創造

自らの専門性を高め発揮していくうえで、個人の領域ではその支援が、個人によるものか職能によるものかについては紛らわしいが、社会福祉士会員になることで、社会福祉士としてなそうとする支援が、あらたな職能として、定義づけるなどその役割を創造できる価値がある。

2. 社会福祉士会員である価値と社会福祉士会を運営する価値

(1) 職能の保護

社会福祉士会員として、社会福祉士会の運営に参画することによって、保護すべき職能の有する価値とその優先順位を選択し、職能の保護に参画できる価値がある。

(2) 職能の育成

社会福祉士会の運営に参画することで、社会福祉士の職能として育成すべき事柄について選択して実行できる価値がある。

3. 社会福祉士会を運営する価値と社会福祉士会の存在価値

(1) 職能の主張

社会福祉士会を運営し、その存在の認識を広めていくことで、会員の活動実践に基づく社会福祉士固有の職能を社会に主張し、社会的認知とその活躍の場を獲得できる価値がある。

(2) 職能の顕在化

社会福祉士会の存在を社会が意識する関係性を高めていくことは、社会福祉士の職能を社会的に顕在化し、社会福祉士の社会的存在価値を示していける価値がある。

4. 社会福祉士会が存在する価値と社会福祉士が存在する価値

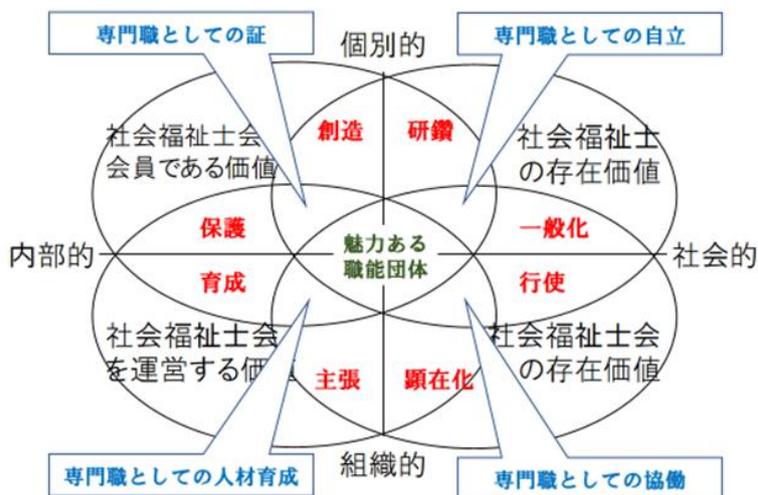
(1) 職能の行使

社会福祉士会が存在し、個々の社会福祉士が活動していくことで、その社会的認知の中で職能の行使をしていくことが可能となる価値がある。

(2) 職能の一般化

社会福祉士が、社会福祉士会の存在により認識された職能の行使により、社会的に一般化した社会資源として活動できる価値がある。

図2 3つの要が重なるところに存在する効果



5. 3つの要素が重なり合うことで得られる効果

(1) 専門職としての自立

【社会福祉士の存在価値×社会福祉士会員である価値×社会福祉士会の存在価値】

社会福祉士の存在価値を高める要素として、職能者としての力の行使、社会資源としての職能の一般化、職能として抱える課題に対する研鑽と、新たな職能の創造の価値が存在する。これらの要素から、社会福祉士という専門職としての自立を成す効果がある。

(2) 専門職としての協働

【社会福祉士会の存在価値×社会福祉士の存在価値×社会福祉士会を運営する価値】

社会福祉士会の存在価値を構成する要素としては、職能を主張し、社会的な顕在化をすすめる、その職能の行使を支え、社会資源としての一般化を推し進めることが存在する。

こうした、職能を社会的な認知を深めていくことで、社会福祉士が固有の専門職としてその機能と、価値を前提に多職種と協働していく環境を整える効果がある。

(3) 専門職としての人材育成

【社会福祉士会を運営する価値×社会福祉士の存在価値×社会福祉士会員である価値】

社会福祉士会を運営する価値を構成する要素としては、職能の保護、育成、主張及び社会的な顕在化を成していくことが存在する。

こうして保護され顕在化していく活動により、数々の人材育成上の課題を明確化するとともに、その職能の基盤を共有するため、専門職としての人材育成をもたらす効果がある。

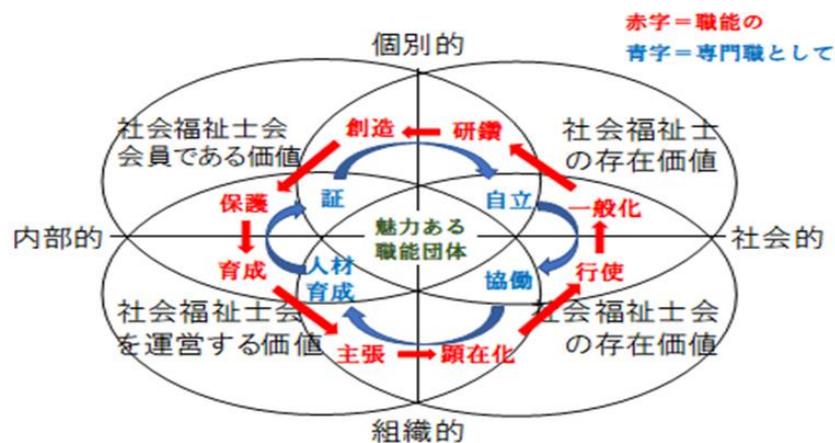
(4) 専門職としての証

【社会福祉士会員である価値×社会福祉士会を運営する価値×社会福祉士の存在価値】

社会福祉士会員である価値を構成する要素として、職能者としての研鑽と職能の創造、そしてその職能の保護と育成が存在する。

こうして定義された職能の様を後ろ盾として、自らの職能の行使を否定されることなく、その専門職としての社会的証を得られる効果がある。

図3 価値と効果の相互関係



6. 魅力ある職能団体となる要素

(1) 職能に対する価値の相互関係

個としての社会福祉士の存在から魅力ある職能団体としての社会福祉士会を構成するまでの相互関係により価値が相乗的に生み出されていく循環構造

① 職能者としての技能の「研鑽」

↓

② 技能を行使できる役割の「創造」 (職能の新たな役割や機能の創造)

↓

③ 役割を支えその価値を「保護」 (利害関係から職能を保護)

↓

④ 価値を高め実践するための「育成」 (職能の実践者を増やす)

↓

⑤ 実践することを明らかにするための「主張」 (社会福祉士の有用性を示す)

↓

- ⑥ 明らかになった物事を社会資源として「顕在化」（社会福祉士の存在価値を社会に示す）
↓
- ⑦ 社会資源としての役割の「行使」（社会福祉士の活動しやすい社会環境づくり）
↓
- ⑧ 役割を果たしていくことによる職能の「一般化」
↓
- ⑨ 一般化された職能の行使にむけ技能を高めるための「研鑽」=①へ

(2) 専門職として得られる効果の相互関係

個としての社会福祉士の存在から魅力ある職能団体としての社会福祉士会を構成するまでの相互関係により専門職として得られる効果が相乗的に生み出されていく循環構造

- ① 専門職として必要な職務遂行が「自立」
↓
- ② 職務遂行にあたり他の専門職と「協働」
↓
- ③ 他の専門職と高度な対応を可能とする「人材育成」
↓
- ④ 高度な対応できる専門職としての「証」（正しさの定義づけ）
↓
- ⑤ より専門的な職務遂行が「自立」⇒①へ

7. 分析結果

社会福祉士会が、社会福祉士の専門職としての自立を支え、その専門性の証として後ろ盾となりながら、その実践と実証に基づく専門的な職能者として人材育成を果たし、社会福祉士が社会的な協働資源として協働できる環境を整備できるのであれば、社会福祉士会は、個々の社会福祉士の職能者としての自己実現に必要な魅力ある職能団体として機能できる。また、これらの循環構造の評価的視点としては、求められる専門職としての「自立」と実施しようとする「人材育成」の整合性や、社会福祉士会が正当性を「証」をたてたことと、実践における「協働」関係の整合性があり、これらの内容に齟齬があれば循環がどこかで阻害されていることを示している。

社会福祉士会の中期計画作成において、各領域における価値や効果の循環構造を構築し、その評価、改善をし続けられる仕組みづくりが重要であると分析する。

【経過】

2019年 9月24日 第1回中期計画策定推進プロジェクト会議 磯村政範委員原案提出
2019年 12月20日 中期ビジョン基礎資料として再構成